

令和7年度第3回京都市市民参加推進フォーラム会議 次第

1 開 会

2 議 題

【第1部】

- (1) 次期市民参加推進計画及び地域コミュニティ活性化ビジョン等（以下「次期ビジョン」という）の作成について
次期ビジョン素案の報告（資料3・4）

【市民意見を聴く場】

- ・ フィッシュボウル方式による対話（まちづくり活動の実践者約60名参加）
- ・ 問い ※事前に参加者に周知（可能な方は事前に回答）
 - ① 参加の意義：（自身の経験も踏まえて）人々が市政に参加し、まちづくり活動を行う意義は何だろうか。
 - ② 参加が進んだまちの姿：より多くの人々が市政やまちづくり活動に参加するようになったまち（自身の周囲や京都全体）は、現在とどう変わっているだろうか。
 - ③ 参加を増やすためにできること：より多くの人に市政やまちづくり活動に関わってもらうために、自分自身ができることは何だろうか。

【第2部】

- (2) 次期ビジョンの作成について
次期ビジョンに係る議論（資料4・5・6）

日時：令和7年10月13日（月）

第1部 9時30分～10時15分

第2部 11時30分～13時30分（最大14時まで）

※ランチミーティング・休憩含む

場所：京都市役所分庁舎4階 第6会議室



本日の全体スケジュール

資料 1

※ 出席者:(A)市民参加推進フォーラム委員、(B)まちづくり活動実践者

	分庁舎4階 オープンスペース	分庁舎4階 会議室	本庁舎屋上
9:30		9:30～10:15【45分】(A) <u>市民参加推進フォーラム(第1部)</u>	
10:00	10:00～10:20【20分】(B) <u>参加者の自己紹介等アイスブレイク</u>	※ビジョン素案のインプット	
10:30	10:20～11:30【約70分】(A) (B) <u>市民意見を聞く場</u> <u>市民対話会議</u> <u>まちづくりセッション</u>		
11:00	※松井市長出席		
11:30		11:30～13:30【120分】(A) <u>市民参加推進フォーラム(第2部)</u>	11:30～13:00【90分】(B) <u>まちづくりBAR(懇親会)</u>
12:00		【11:30-12:00】 弁当食べながら市民意見を聴く場の振り返り等 【12:00-12:10】 休憩 【12:10-13:10】 グループワーク(目指す姿、施策の方向性) 【13:00-13:15】 全体で意見交換(ビジョン全体) 【13:25-13:30】 今後の予定(パブコメ等)伝達等 ※最大14:00まで	
12:30			
13:00			
13:30			

京都市市民参加推進フォーラム委員名簿（令和 7 年10月 1 日時点）

（敬称略／ 5 0 音順）

氏 名 （◎：座長、○：副座）	肩 書 等	委嘱期間
荒木 勇輝	特定非営利活動法人寺子屋プロジェクト（Tera school）代表	R2.4.1～R8.3.31
◎ 乾 明紀	京都橘大学経済学部 教授	H31.4.1～R9.3.31
今里 佳奈子	龍谷大学政策学部 教授	R7.6.1～R9.5.31
岡田 祐樹	京都青年会議所 副理事長	R7.1.1～R8.12.31
○ 白水 育世	一般社団法人マチノミカタ 理事	R4.4.1～R8.3.31
竹田 明子	公益財団法人京都市ユースサービス協会ケア事業担当統括	R6.8.1～R8.7.31
千葉 晃央	京都光華女子大学看護福祉リハビリテーション学部 准教授	R6.8.1～R8.7.31
中嶋 もも花	市民公募委員	R7.4.1～R9.3.31
○ 並木 州太郎	龍谷大学政策学部 講師	R3.4.1～R9.3.31
西澤 純	市民公募委員	R6.4.1～R8.3.31
平井 誠一	株式会社西利 代表取締役社長	R7.4.1～R9.3.31
平野 哲広	京都信用金庫QUESTION 館長	R6.8.1～R8.7.31
松井 順子	藤城学区自治連合会 副会長	R7.6.1～R9.5.31
水本 園乃	市民公募委員	R7.4.1～R9.3.31
森田 明男	市民公募委員	R6.4.1～R8.3.31

本日の会議では、以下のことを目指します。

- ・ パブリック・コメントに向け、次期ビジョン素案全体に係る議論を行う。
- ⇒ これまで及び本日の会議並びに地域コミュニティ活性化推進審議会での意見を踏まえて、パブリック・コメント案を作成し、次回の会議で確認。

【報告】 所要時間：約25分

- ・ 第2回会議で出された次期ビジョンの「目指す姿」、「施策」等に係る意見等の振り返り
- ・ 次期ビジョン素案の説明

第2回会議の振り返り

◆ 第2回会議での意見

グループ対話① 次期計画・ビジョンの「目指す姿」に盛り込みたい内容は？

<Aグループ> 白水副座長、荒木委員、竹田委員、千葉委員、中嶋委員、水本委員

- ・ 提案のポイントは3つある。1つ目は、「すべての人に『居場所』と『出番』のある社会」から展開するのはよい。2つ目は、地域活動と市民参加の相乗効果を重視した方がよい。NPOや大学生の活動と、町内会や住民福祉協議会、PTAなどの既存の仕組みとしてある活動の接点が少ない。両者の交流を増やす視点があるといいのではないか。3つ目は「関係人口」とのつながり。京都市は、自宅が京都市外にある方が関わっていたり、東京に住んでいる方が京都のファンだったり、関係人口が多い。関係人口にも関わってもらうものとして今回のビジョンを示せるといいのではないか。
- ・ 現在の関わり方は、運営に入る以外の関わり方が示されていない。イベントなどの当日参加だけ、企画だけ、当日のお手伝いだけなど、色々な関わり方のバリエーションがあるといい。
- ・ 「関係人口」は共感する。京都には学生が多いが、卒業すると離れていく人が多いので、そういった人も関われるといい。
- ・ 自分は市民参加がされている場所に行けないと思っている子どもたちにも、どのように市民参加を広げていけるか。どうすれば支え合いの文化を作っていけるか。
- ・ インバウンドなどの関係人口に関して、京都の人には変化を受け入れがたい感覚もあると思うが、未来に向けて変化も必要。そういった人と、新しい京都の形づくりができるようなビジョンができればよい。
- ・ 「日常生活の延長線上」という言葉がとても良いと思った。聞いてみると市民はたくさんの意見を持っているが、伝えられていない、言っても届かないと思っているので、日常生活の延長線上で関われるのはいいと思う。
- ・ 「関係人口」にも共感する。自分の周りにも京都に愛着を持っている大学生は多いが、他の地域から来ていると、市政に関心があっても、市民ではないので意見を言えないと感じている。

- ・ 京都に長く住んでいて楽しいと思うのが、お店や銭湯など、日常生活で立ち寄る場所でちょっとした会話ができること。がつつりしたコミュニティも大事だが、ライトなつながりもいい。顔見知りが増え、災害時の声かけもできる。
- ・ 「関係人口」には賛同する。京都にはファンがたくさんおり、東京の友達に会うと「京都どう。」と聞かれる。心の中に京都を持っている人と関係人口というキーワードでつながれるとよい。
- ・ 「次世代」が気になる。これまで頑張ってくれたまちづくり関係者と子どもたちなどの次世代が会って、一緒に議論したり、地域の歴史を学び合える場等が学区ごとにあると、地域の人にとってもアップデートになる。
- ・ まちのあらゆるところで笑顔で挨拶が交わされるような状況が重要ではないか。「声掛け」や「おせっかい」、「つながり」などをキーワードに、周りの人たちにポジティブな感情を持って気にかける・声をかけるのが大事ではないか。盆踊りなどの地域行事がハレとしてありながら、ケとして日常の声掛けなどがされていくのがよい。大学生がボランティアとして地域行事に参加するなど、多様な関わりができるとうい。
- ・ 「分断」が起きないような、「分断」の反対の状態を表す言葉として、包摂にも関連する「つながり」がキーワードになるだろうか。ゆるい挨拶や声掛けも含まれるが、分断が起きないコミュニティのあり方を考えたい。
- ・ 京都は祇園祭などが目立つが、それ以外にも小さな地域のお祭りや運動会などがある。そのような小さなお祭りこそ大事にすることで、地域とのつながりが密接になる。地域と関わってよかったと思える小さな機会を大事にしたい。
- ・ ヤングケアラーとそれを取り巻く社会に分断を感じている。「本当にヤングケアラーなのか。」「親が介護できないのか。」「なぜ福祉制度を使わないのか。」といった声があり、単に制度を使えばいいということではなく、どうすれば一人ひとりの想いに耳を傾けていけるのか。

第2回会議の振り返り

◆ 第2回会議での意見

グループ対話① 次期計画・ビジョンの「目指す姿」に盛り込みたい内容は？

＜Bグループ＞ 並木副座長、今里委員、西澤委員、平井委員、平野委員

- ・ 「市民参加」や「ウェルビーイングなまち」が大切だと思っている人以外の人に参加してもらうのが難しい。商工会議所で中小企業支援の活動などをやっているが、サービスが必要な人ほど知らないことが多い。
- ・ 前回出てきた「おせっかい」は、知らなくて損をしていたり、価値をわかっていない人に「おせっかい」をして伝えていくことが大事。そのためには、なぜ興味がないのか、なぜ価値を見出していないのかを知る必要がある。
- ・ 公共的なサービスを消費者として受けるのが当たり前になってしまっている。自分たちが関わって、決めて、創り出すのが「参加」。大事にしていることほど、関わる意味がある。消費者から「関わる人」になってもらうのは難しいが、そのための「おせっかい」ができるとうい。最初は消費者として面白いと思ってもらい、そこから立場が変わって関わることの大切さに気づいてもらう。
- ・ ロータリークラブでは、若い世代は忙しい中で働き大変なのだが、75歳を超えた人たちは楽しそうに活動している。仕事も引退しており、ロータリークラブが「居場所」になっている。地域活動も年配者にとっての居場所になっているのではないか。
- ・ サービスにアクセスすべき人がアクセスできていないことに関して、間で「仲介する人」は重要である。地域コミュニティは深い関わりの中で、地域の人々の情報や知恵などが蓄積されており、ある人に聞いたなら地域のことが全てわかるような状況になっている。
- ・ 「やりがい」に関して、生きる糧であり、「居場所」や「出番」であり、ひいてはウェルビーイングにもつながっていく。QUESTIONにはOriHimeというロボットを置いており、障がいなどで普段外出できない人が、OriHimeを使って接客などができる。生きがい、やりがい、出番があることが、ウェルビーイングなまちには必要なだろう。

- ・ スタートアップの人たちは、みんな同じようなところで止まったり、悩んだりしているが、起業を経験した人に聞けばすぐ解決することが多い。市民参加も、「おせっかい」できる人、「仲介」できる人にうまくつながっていない。市役所や想いのある市民もたくさんいるが、それらのマッチングができていない。
- ・ ビジョンの構造として、市政参加の軸と、まちづくり活動の軸がある。そして、まちづくり活動にも、地域コミュニティレベルのものと、企業や旅行者も参加してもらうものがあるが、それらが別々に行われているため、仲介する「繋ぎ手」も1種類だけでは足りないだろう。
- ・ 行動するためにメリットを求める人が多い。今までボランティア活動をしてきた人の中には、メリットを求めることを良くないと思う人もいるかもしれないが、メリットは感じられる方がいいだろう。
- ・ 自治会活動などはすぐにメリットがあるわけではないが、災害時に助かるなど長い時間軸で帰ってくるもの。地域レベルでのまちづくり活動も素晴らしいが、必要性を感じていない人には意義が伝わらない。それをどのように伝えていくのがよいか。
- ・ 「居場所」と「出番」はよくできているが、「居場所」がなければ「おせっかい」が必要ないこともある。頑張りすぎた人が「居場所」に戻って充電することもある。動的なものなので、上位概念として置いてもいいのではないか。
- ・ 長い人生の中で「居場所」は動いていく。学生は学校、働いていると会社、リタイアすると家になり、出番と役割も変わっていく。地域に若い人が参画していなくても、他の場所で活躍していれば、いずれ地域で活動するようになる。
- ・ これまで短期のものも長期のものも義務感でやっていたが、短期のものはもっとワクワク感で動かしていくのがいいかもしれない。時間軸の使い分けは重要ではないか。

第2回会議の振り返り

◆ 第2回会議での意見

グループ対話② グループ対話①で話した「目指す姿」を実現するためにはどのような「施策」が必要か？

＜Aグループ＞ 白水副座長、荒木委員、今里委員、竹田委員、西澤委員、水本委員

- ・ 「分断」に関して、地域活動をサポートしていた時に、人と考えが違くと、シャットアウトされたり、見えない壁が作られることがあった。違いがあるから拒否ではなく、違いを楽しみながら、向き合えば、分断ではない方向に進める。
- ・ 「分断」について、自分の周りだとヤングケアラーの想いをなかなか聴いてもらえないという分断が気になっている。
- ・ 「分断」が起きる理由のひとつは、それぞれのグループが違うところにいるからではないか。グループをつなぐ「繋ぎ手」は重要であり、みんなが同じ場所にいられるようなきっかけづくりも重要ではないか。最初はサービスを受ける側だった人に「出番」が、サービスを受ける側と提供する側ではなく、一緒に交わって何かを創っていけるようになるのではないかな。
- ・ 一緒に食べたり踊ったり歌ったり、最初は楽しいところから始めて、みんなで場や経験を共有できるとよく、そこには「繋ぎ手」が必要になる。
- ・ それぞれのグループで文脈が異なるので「翻訳」する人が必要になる。違いを前提にしながらも、間に立って通訳・翻訳する人がいると、同じ土壌で話し合えるようになる。「橋渡し役」や「結節点」は、これからの施策で重要な役割になる。
- ・ ファシリテーターやコーディネーターは黒子役で目立たないのだから、だからこそその良い働きがある。ファシリテーターやコーディネーターの働きを見える化できるというのではないかな。それが「繋ぎ手」にもつながる。
- ・ 活動を大きく2つに分けると、社会課題を解決する「課題解決」活動と、楽しく参加して結果として社会のためになる「価値創造」活動がある。市民参加のハードルを下げるには、課題に対応するではなく、楽しいからやっつけ活動が合っており、もっとポジティブな活動が増えるといい。

- ・ 色々な人が楽しく関わる仕掛けとして、それぞれの地域のHPがもっと機能するとよい。まだ関わりを持っていないが、忙しい中で何か関わりたいという人もいます。掲示板のようなもので、人を募集したり、情報発信ができるとよい。
- ・ SNSを使っている若い世代とそうでない世代だけでなく、SNSを使っている若い世代の中でも「分断」が起きている。また、京都市内はオーバーツーリズムで大変だが、一方で過疎化が進んでいる地域もある。色々立場はあるものの、お互いの立場を移動してみる。京都市民だが京都市内を観光してみるなど、楽しく立場を変えてみる取組など、色々な仕掛けがあるといいだろう。
- ・ 大学によっては学生の地域活動を支援する仕組みがあるが、町内会や住民福祉協議会と学生と一緒にやる活動に対しても、少額でも補助金制度があれば、両者をつなげてもいいのではないかな。個々の町内会や大学の取組で終わるのはもったいない。
- ・ 若い人が地域に入っていくための後押しは大学もできると思う。
- ・ ひとりの熱意から始まることもあるので、個人に対する支援でもいい。京都市内の一人の大学生から始められるような軽さのものから。
- ・ 深草地区でまちづくり活動の支援をしていたときに、深草支所ではミートアップという事業をやっていた。それは、地域団体やNPO団体、学生団体などの活動を体験できるような出会いの場であったが、キッズニアのような子どもたちの体験機会とかけあわせても面白いかもしれない。そのような事例もあるので、うまく応用しながら、自分の学区や地域以外の活動にも参加できるというのではないかな。
- ・ 京都市外の人からすると、京都の人との触れ合いはハードルが高いので、そのような取組は意義がある。異質な人が一緒にいられる場所になる。

第2回会議の振り返り

◆ 第2回会議での意見

グループ対話② グループ対話①で話した「目指す姿」を実現するためにはどのような「施策」が必要か？

＜Bグループ＞ 並木副座長、千葉委員、中嶋委員、平井委員、平野委員

- ・ コーディネーターは増えてきていると思うが、それぞれの専門分野を超えての交流などはできていない。「繋ぎ手」同士の交流などもあってよい。
- ・ コミュニティはみんなが繋がっている状態で、深さがある。情報などが蓄積されるので、誰が何をできるのかわかる人に聞けばわかる。一方で、知っている人、繋ぎ手がいないと、なかなかつながらない。QUESTIONでは、外とのネットワークを薄く持つことと、高密度のつながり持つことの両方をやろうとしている。
- ・ 「関係人口」で言うと、住んでいる地域には寝に帰るだけで接点を持ってない人も、働いている地域では関わりを持てるかもしれない。年齢によって「居場所」が動くという話をしたが、それぞれの居場所で関わりを持ち、その必要性を理解できれば、住んでいる地域でも参加するようになるのではないか。
- ・ 目指す姿としては、どこの居場所でもいいので、今の居場所の中で市民参加を体感できるような仕組みに落とし込む。必要性や良さを理解するには、実際に体験するしかない。住んでいる地域に限定すると大変な人も多いと思うので、生活や年代によって「居場所」は色々あっていい。
- ・ 区民運動会や地蔵盆に、その地域にある企業や大学が関わるといいのではないか。企業は記念品やお金を出すという関わり方もあり、大学生を町内会の一員として区民運動会に参加するように働きかけるのもよい。
- ・ 町内会などに入った場合に、企業のCSRとして発信できるようにしてはどうか。長刀鉾の保存会と町内会は別であるが、町内会は銀行や不動産会社など大企業ばかりで、社員が町内会長をやっている。
- ・ 地域コミュニティ活性化推進審議会は、ワンルームマンション住まいの人が町内会に入らないという問題に対して、不動産会社と連携して町内会の案内をすることでスタートした。市民公募委員に大学生の枠を作って入ってもらうなど、市政レベルの検討もできるといい。
- ・ 女子大にいた時、学生が大学から安全に帰宅できるのは、地域の治安がいいからだというところから議論をスタートした。
- ・ そもそも、市民参加はみんなが目指すべきものなのか。一部の人は自己投影できると思うが、みんなの夢ではない。今までの市民参加では、その人たちの声は拾えていない。市民参加自体を広げることによって、色々な人のやりたいことやありたい姿を拾って、アップデートしていくことができる。
- ・ 市民参加を良いものとして押し付けると、「市民参加しなさい」と上から聞こえる。すべてを行政でやる必要はなく、企業とコミュニティでできることもある。押し付けられるとやる気が一気になくなる。自分たちで考えてやる方が続き、やりがいも生まれる。
- ・ 例えば、金融機関の職員からすると、地域コミュニティに入ると、地域の人が通帳を作ってもらえるかもしれない。そのようなメリットがある方が、強制的に自治会活動をさせられるよりも、前向きに活動できるのではないか。
- ・ 学生の半分は一人暮らしをしており、地域とのつながりが少ない。そのような人が地域に目を向けて欲しいが、地域通貨はそのきっかけになるのではないか。
- ・ 市民アンケートの結果でも、参加してみたい活動としてゲーム性のあるものが選ばれていた。
- ・ ソフトクリームを販売している店が、マイルがたまると1巻き多めに巻くなどはできそう。企業としても店にもたくさんお客さんが来てくれる方がいいし、多少のサービスはできる。マイルがたまると、各企業がサービス品を出すなど。
- ・ 稲森和夫の言葉に「動機善なりや、私心なかりしか」があるが、動機は善に持つ必要があるが、ゲーム感覚で増えていくのは楽しい。ゲーム感覚で子どもが参加すると、大人もついてくる。

第2回会議の振り返り

◆ 第2回会議での意見

全体対話 グループ対話を踏まえた、次期計画・ビジョンにおける「目指す姿」、「施策」は？

- | | |
|---|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 市民参加の必要性に関して、モヤモヤしている人には、まずは「体験」してもらうことが重要であり、どこでその体験をしてもらうか。・ 京都ファンクラブを作ろうとしているが、その活動のひとつにまちづくり参加があってもいいのではないか。「関係人口」に対するまちづくり活動への参加施策としてどうか。・ 企業や学校がある地域で、まちづくり活動を経験するのは良いと思った。企業にとっては、C S R 活動にもつながる。まずはみんなが実体験をするのが重要だろう。・ 町内会活動に企業や学生が入るといいが、なかなか進んでいない。自分の周りでも、大学生が地元の運動会に参加したら、地元の人が大喜びしていた。大学によっては、複数の町内会にまたがっているところもあるが、地域があるから学生も安心して学校に通えている側面もあるので、良い取組である。・ ネガティブな課題解決よりも、楽しくポジティブな関わり方というのがポイントになるのではないか。・ 個を大事にする風潮とスマホの普及によって、スマホより楽しくないと面倒くさがって地域活動にも参加しないだろう。ひとりで家でスマホを触っているよりも楽しいことを伝えたい。・ このようなビジョンがあることを知らない人も多い。市民一人ひとりに届けるような情報発信を考えていきたい。・ 京都に集う多様な主体がいるが、その人たちが出会えるスクランブル交差点のような場所が必要ではないか。区 H u b とも関連すると思うが、ちょっとすれ違うくらいで気軽に関わりあえる場があるといいのではないか。リアルだけでなく、S N S などでもあるといい。・ 防災などの観点で市民参加は必要なのだが、ネガティブな印象や義務感を感じる。ビジョンでは、やったら楽しくなるという方向性にしたい。 | <ul style="list-style-type: none">・ 関わり合いが大事というのは共通認識。それをどうすれば作っていいのか。色々な段階があるが、最初は楽しく関わり、そこから大きな課題解決に向かっていけるとよい。楽しみながらできることから始めて、まずはやってみる・体験してみる。違う立場を経験すると「分断」を超えてつながっていけるのではないか。「繋ぎ手」も両方のグループでキーワードとして出たが、色々な人がいるからこそ間で翻訳する人が必要になる。・ 年寄りから説教されると思うと参加したくなくなる。大学でも、つながりが大事と言っている年配の先生が、若い世代のつながる手段であるTikTokを知らなかったりする。ジェネレーションギャップは存在するが、若い世代と上の世代がお互いの知っていることを共有しあって、ギャップを埋めることができないか。一方で、地域に出るように言うだけでなく、怒られた時に駆け込めるような守られる場所も必要ではないか。・ 働いている場所での活動をきっかけとして市民参加につながるという観点で議論がされていたが、昨年のフォーラムで「市民参加のはしご」に関する議論があり、企業との協働は「挑戦する」に位置付けられていたが、市民参加のきっかけにも位置付けられるのではないか。・ 今日都市部での市民参加の議論に集中してしまった。京都市内にも、京北など人口減少で縮小しているエリアもあり、そこでの市民参加はどうなっていくのか。そういう地域もある中で、どのように市民参加をデザインしていくのかも考えたい。 |
|---|--|

市民参加推進フォーラムでの意見等

◆ 次期ビジョンにおける「目指す姿」、「施策」についての主な意見

<関係人口>

- ・ 市外・地域外に住んでいる通勤・通学者や、東京在住の京都ファンといった関係人口にもまちづくりに関わってもらうものとして、ビジョンに示せると良い。
- ・ 京都に愛着を持っている大学生は多いが、市外から来ていると、市政に関心があっても、市民ではないので意見を言えないと感じている。

<繋ぎ手>

- ・ 市民参加に関して「おせっかい」できる人、「仲介」できる人にうまくつながっていない。市役所や想いのある市民もたくさんいるが、マッチングができていない。
- ・ 市民参加には、市政参加とまちづくり活動がある。まちづくり活動にも、地域コミュニティのものと、企業や旅行者も参加してもらうものがあるが、別々に行われており、仲介する「繋ぎ手」も1種類だけでは足りない。
- ・ グループをつなぐ「繋ぎ手」は重要であり、みんなが同じ場所にいられるきっかけづくりも重要。サービスを受ける側と提供する側ではなく、一緒に交わって何かを創っていけるようになる。

<企業>

- ・ 区民運動会や地蔵盆に、その地域にある企業や大学が関わると良い。企業は記念品やお金を出すという関わり方もあり、大学生を町内会の一員として区民運動会に参加するように働きかけるのもよい。
- ・ 企業や学校がある地域で、まちづくり活動を経験するのは良いと思った。企業にとっては、CSR活動にもつながる。まずはみんなが実体験をするのが重要だろう。
- ・ 東京から京都に転勤で来ている方が祭等に参画し、京都への愛着を高められると、京都を離れてからも、祭の時期には京都に戻ってきてくれる例もある。

<おせっかい>

- ・ 「市民参加」が大切だと思っている人以外の人に、「おせっかい」をして伝えていくことが大事。
- ・ 公共的なサービスを消費者として受けるだけでなく、自分たちが関わって、決めて、創り出すのが「参加」。消費者から「関わる人」になってもらうための「おせっかい」ができるとよい。

<学生・大学>

- ・ 大学によっては学生の地域活動を支援する仕組みがあるが、町内会や住民福祉協議会と学生と一緒にやる活動も支援してもいいのではないかな。
- ・ 個々の町内会や大学の取組で終わるのはもったいない。
- ・ 地域があるから学生も安心して学校に通えている側面もあるので、区民運動会などに学生が参加するのは、良い取組である。

<活動>

- ・ 活動を大きく2つに分けると、社会課題を解決する「課題解決」活動と、楽しく参加して結果として社会のためになる「価値創造」活動がある。市民参加のハードルを下げるには、課題に対応するではなく、楽しいからやってしまう活動が合っている。
- ・ 短期のものも長期のものも義務感でやっていたが、短期のものはもっとワクワク感で動かしていくのがよい。時間軸の使い分けは重要。

<参加>

- ・ 市民参加はみんなが目指すべきなのか。一部の人は自己投影できるが、みんなの夢ではない。今までの市民参加では、その人たちの声は拾えていない。
- ・ 市民参加を良いものとして押し付けると、「市民参加しなさい」と上から聞こえる。すべてを行政でやる必要はなく、企業とコミュニティでできることもある。
- ・ 関わり合いが大事というのは共通認識。どうすれば作っていいのかな。色々な段階があるが、最初は楽しく関わり、そこから大きな課題解決に向かっていけるとよい。楽しみながらできることから始めて、まずはやってみる・体験してみる。違う立場を経験すると「分断」を超えてつながっていいのではないかな。
- ・ 都市部での市民参加の議論に集中してしまった。京都市内にも、京北など人口減少で縮小しているエリアもあり、そこでの市民参加はどうするのか。そういう地域もある中で、どのように市民参加をデザインしていくのかも考えたい。

◆ 第1回会議での意見

<Aグループ> 乾座長、荒木委員、今里委員、岡田委員、水本委員

- ・ 自分の町内会は活発で、地蔵盆や運動会に参加する人が多く、「①まちづくりハブ市民」が多い。ただ、仕事で忙しい人が増えたり、高齢化で担い手が少なくなっている。
- ・ 昔から地元に住んでいる人や商店をやっている人は「①まちづくりハブ市民」になりやすい。
- ・ 高齢者は「①まちづくりハブ市民」が多く、30代や40代は他のタイプが多いのでは。マンション住民だと、自治会ではなくマンションの管理組合程度であり、夏祭り等を自ら企画するという概念がない。近所でやっているまつり等に参加することで、つながりを感じる機会があるのでは。
- ・ そもそも自治会の概念が薄れており、マンション住民にも自治会に入ってもらうため、条例を作って、不動産業界の人にも協力してもらって呼びかけることをやった。
- ・ 学生と一緒に地域活動をするNPOをやっていたが、何もつながりがない状態で活動に参加する学生は、最初はサービスを受ける側の意識が強い。ただ、続けているうちに主体的に運営に関わるようになり、「①まちづくりハブ市民」になることもあると思う。
- ・ 学生の活動として、大学近くの地域の子どもに勉強を教えるボランティアサークルがあったり、大学には京都科目という京都の伝統文化などを学ぶ科目があったりするが、どちらも結構人気がある。
- ・ 学部や学科に関係なく、京都の大学に、まちづくり活動への参加を必須とする枠があってもよい。自ら手は挙がらなくても、裁判員のように、当たったら参加するのでは。
- ・ 「おせっかい」にネガティブなイメージもあるが、実際は知り合いに誘われて活動に参加することも多い。「越境」を増やすことが重要である。
- ・ 知り合いに誘われて学生が市民公募委員になる例もある。「おせっかい」は大事だと思う。

- ・ NPOをやっているので、「①まちづくりハブ市民」とのつながりがある。そこに「②まちづくりポテンシャル市民」を招き入れられるといい。「③居場所探し市民」や「④潜在的ぼっち市民」はアプローチしにくいと思うが、「①まちづくりハブ市民」にいかに関わりを誘ってもらえるかが大きい。また、京都市外に住んでいても、NPOをやっているなど、「①まちづくりハブ市民」に該当する人もいる。
- ・ 人を誘うにあたっては、魅力的な企画やイベントだと誘いやすい。日常的な取組は、1回限りではなく継続して参加するためハードルがあるが、何かひとつでも面白そうな仕掛けを作れると良い。例えば、区役所で簡単に申請できる支援金等があれば、魅力的な企画がもっと増えると思う。
- ・ 「おせっかい」にはネガティブなイメージがあるので、新しい、魅力的なフレーズがあればよい。
- ・ 露骨ではあるが、まちづくり活動に参加すると大学の単位がもらえるなど、学びの仕組に組み込むという観点は重要であり、コンテンツ魅力化のひとつの手段でもある。高校の探究学習とまちづくり活動の連携なども増えているが、まだ一過性のものに留まってしまっており、単位を取ったら終わりではなく、その後も継続して関わってもらうための設計も必要だろう。
- ・ 単位はもらえないが参加してくれる人が一番自発的で、熱意がある。ただ、最近では、若者も忙しく、コスパやタイパを気にするところがある。
- ・ 「②まちづくりポテンシャル市民」は、最初は無理やりでも、続けるうちに自分ごとになるかもしれない。また、まちづくり活動をやっている人たちがカッコよくて参加するという人もいる。「①まちづくりハブ市民」から市民社会を形成していくのが大事だろう。
- ・ まちづくりへの参加も、申請のしやすさ、広告の出しやすさなど、コスパ・タイパ良く取り組めるよう、整備できることはあるだろう。
- ・ 大学生は卒業すると京都を離れる人も多い。恩を受け、返そうと思う気持ちが湧くことで、少しでも京都に残ってくれる人が増えないか。
- ・ 個人情報保護の問題はあるが、AIなどを活用し、活動と人のマッチングができないか。

◆ 第1回会議での意見

<Bグループ> 白水副座長、並木副座長、竹田委員、西澤委員、 平井委員、松井委員

- ・ 賃貸に住んでいる若い人たちは、自治会・町内会に参加する機会がない。現状では、「①まちづくりハブ市民」は自治会・町内会に参加している人がメインではないか。
- ・ 学生は、「③居場所探し市民」又は「④潜在的ぼっち市民」に入るのでは。
- ・ 「②まちづくりポテンシャル市民」は、企業で働いている人など、京都にゆかりはあるが、活動への参加まではしたことがない人ではないか。
- ・ まちづくり活動を学生や若い人はどう捉えているのか。大学生のサークルなど、活動はしているが、まちづくり活動として認識していないケースもあると思う。ただ、アクティブな層は「①まちづくりハブ市民」に入りそう。
- ・ フィールドワークなどを取り入れている学校も多いが、その場合、活動をしてはいるが自主的ではないので、結果として、つながりを感じていないかもしれない。また、自分のやりたい活動をできてはいるが、なかなか共感を得にくい状態の人も、一定数いそう。
- ・ 自分のやりたいことの主張だけでなく、つながりあう機会も重要ではないか。一人暮らしの人などは、若者でも「④潜在的ぼっち市民」にあたる人がいそう。
- ・ 自分は「①まちづくりハブ市民」で、友人も地域活動をしている人たち。ただ、10年後も同じ状態かはわからない。
- ・ 町内会の役員等をしてはいるが、国勢調査などの具体的な活動はできないと断る人もいる。「③居場所探し市民」は、活動してはいるが、強制されている状態で、つながりを感じていない。反対に、学区の卒業生でもある大学生に夏祭りのお手伝いの声掛けをしたら、手を上げてくれた。
- ・ 子どもの卒業後もPTAを続けたいという人や、おやじの会に、おやじ以外の人も参加できるように後援会を立ち上げたら手を挙げてくれた人がいる。これが「②まちづくりポテンシャル市民」から「①まちづくりハブ市民」になった事例といえる。
- ・ 学生は、「②まちづくりポテンシャル市民」から「①まちづくりハブ市民」になるポテンシャルがある。

- ・ 自分はこの中で言う「③居場所探し市民」である。家と職場のエリアが異なり、職場ではまちづくり活動をしているが、住んでいる場所ではしていない。居住地では市民参加できない人もいる。高校や大学の近くや、勤務先での活動も市民参加と言えるのではないかな。
- ・ 勤務先でまちの清掃などを行っている人にも、まちづくりに参加しているという気持ちを持てるようにしてあげると良い。参加していることが認識できると、リタイア後も自分の居住地での活動にスライドしやすくなるのではないかな。
- ・ ペルソナ設定についても、居住地の活動だけに限らない方がいいのではないかな。観光客の中にも暮らすように観光したいという人がいる。例えば、祇園祭でも、自腹で山鉦の曳き手ボランティアをしたいという人もいる。
- ・ 自分は「②まちづくりポテンシャル市民」だと思う。仕事ではまちづくり活動をしているが、地元ではやっていない。気持ちはあるが、多忙で活動できない人もいる。「②まちづくりポテンシャル市民」向けに、それぞれの活動に、「ちょっとお手伝いしたい人枠」を設けるなど、段階的に関わるとよい。
- ・ 「①まちづくりハブ市民」は人脈などを積極的に広げていく力を持っているので、コーディネーターの役割を担ってもらえるといいのではないかな。口コミをきっかけに参加するということも増えているように思う。
- ・ 「④潜在的ぼっち市民」が何を求めているのか、じっくり理解していく必要があり、理解のための場を設計できると良い。市民が何を求めているのか、市民自身が考える機会が必要である。
- ・ 「居場所」は守りで、「出番」は攻めと考えると、住む場所と働く場所が別々な人もいるため、これまでの自治会中心の考え方から、観光客の関わり方も含めて、活動への関わり方が多様になるといいのではないかな。
- ・ 体を動かせる人もいれば、体は動かせないがお金なら出せる人もいるなど、参加のかたちは人によって異なる。
- ・ 「④潜在的ぼっち市民」に向かっている人たちを「①まちづくりハブ市民」になれるよう誘導するのであれば、色々な人が活躍できる、交わるような「居場所」や「出番」があるといいのではないかな。
- ・ 学生はスマホを通じてつながる方がリアリティのある世代かもしれない。

◆ 全体像

＜参考＞ 第2回会議資料
(再掲)

地域の現状と課題のまとめ

市民 の状況 (地域住民、学生、企業など)	市民 と まちづくり活動 の関係	まちづくり活動 の状況 (自治会等の活動など)
・まちづくり活動との接点がない。 (忙しい、興味・関心が低い、知る機会がない等) ・参加したくても参加できない。 (どこに相談すればいいかわからない。) ・主体的に関われないと続かない。	・市民とまちづくり活動の間のギャップ (やらされ感、市民の本音や主体性が出せない・引き出せていない・・・) ・思いをつなぐ人がいない ・昔ながらのやり方が強制される ・役割や当番はきっかけになるが、それだけでは続かない	・担い手がいない ・参加者の固定化、活動マンネリ化 ・主体同士のネットワークがない ・役割・当番・使命感で運用 ・引継ぎ優先で見直し機運が生まれづらい ・新しい取組(デジタル化など)が進みづらい



両部会の議論を踏まえた取組の方向性

- まちづくり活動参加へのきっかけや入口を増やしていくには、住民の興味関心や思い等をベースに、まちづくり活動に関わりやすい形を地域の中で増やしていくことが重要。
⇒「まちづくり活動の見える化・魅せる化」、「気軽に参加できる機会の創出」など
- 持続的・主体的にまちづくり活動に関わっていくには、当番や決まった役割の人だけではなく、多様な人の話し合いの下、活動している・したい主体が、主体性を発揮しやすい環境への整備(活動のアップデート)が重要。
⇒「主体的に関わりやすい機会の創出」、「多様な主体の交ざり合い、対話や連携・協働の推進」など
- 異なる活動主体同士の連携・協働には、行政や中間支援者など、媒介者の役割が重要。
⇒「活動や主体間をつなぐコーディネート人材の育成やネットワーク化」など

◆ 今後の方向性①（まちづくり活動への参加促進の視点）

＜目指す方向性＞

身近な地域でのまちづくり活動に住民をはじめ、多様な主体が参加したくなる、思いがけず参加してしまう仕掛けが、暮らしの延長線上に多くあり、住民等がまちづくり活動に関わり、緩やかにつなが的过程中で、居場所や出番が生まれていくことを目指す。

取組の方向性と施策イメージ

＜まちづくり活動の見える化、魅せる化の推進＞

身近な地域でのまちづくり活動への参加につながるよう、SNS活用など活動のビジュアル化やデジタル化（支援）も含め、参加の入口の見える化や個に届く情報発信を推進します。

＜気軽に参加できる機会の創出支援＞

身近な公共空間等において、気軽に参加できる機会や場づくりを進めます。

地縁に加え、学び縁や趣味縁をきっかけにした興味関心から始まる参加や、時間や場所に縛られずイベントだけ参加やオンラインでの参加など、多様な参加機会の創出を支援します。

＜主体的に関わりやすい機会の創出支援＞

子どもから高齢者まで幅広い世代の住民や地域企業や大学など多様な主体が、それぞれが持つ得意分野や専門性を活かすなど、地域の中で主体的に関わりやすい機会の創出を支援します。

人が持つ「わくわく」や「もやもや」など、表出されていない手前の感情を引き出す場づくりを進めます。

＜地域活動への参加促進＞

誰もが住みよく、安心・安全に暮らせる地域社会の実現につながる、防災や防犯、高齢者や児童の見守り、環境美化など地域活動が引き続き行われるよう自治会・町内会への加入促進や各種啓発に取り組めます。

◆ 今後の方向性②（持続可能な活動へのアップデートの視点）

＜目指す方向性＞

地縁団体をはじめ、市民活動団体、地域企業、大学、福祉団体等、多様な主体の連携・協働を促進し、それぞれが強みや特性を発揮することで、まちづくり活動への関わり方をアップデートや新たな行動を生み出すことを目指す。

取組の方向性と施策イメージ

＜デジタルツールの活用促進＞

デジタルツール活用支援による、情報共有の迅速化、負担軽減など、情報発信手段の多様化を支援します。

＜多様な主体の交ざり合い、対話や連携・協働の推進＞

地域の中で視点や得意分野の異なる多様な主体との連携や対話を進めながら、自分たちの地域の課題や特性を把握し、地域の将来像づくりや課題の洗い出し、活動の見直しに向けて取り組めるよう支援します。

＜主体間をつなぐコーディネート人材の育成、ネットワーク化＞

活動に参加した住民等が交流や対話を通じて、お互いを知り、共に活動を進めることができるよう、主体間をつなぐコーディネート人材づくりや、主体間の交流・ネットワークづくりを進めます。

＜行政協力業務のアップデート＞

行政からの依頼事務の担い手としての機能の負担軽減に取り組むとともに、時代に即した在り方を検討します。

目的：次期ビジョン素案について検討する

進め方（70分）：

- 1 グループ対話（50分）：
市民意見を聴く場を踏まえ、次期ビジョンの「目指す姿」と「施策」に盛り込むべき内容は？
次期ビジョンのイメージ図（イラスト）の検討
- 2 グループ対話の共有（5分）
- 3 全体対話（15分）：
次期ビジョン素案の全体を通して、盛り込むべき内容は？

⇒ 本日の議論を踏まえ、事務局においてパブリック・コメント（案）を作成。

<Aグループ>

- 並木副座長
- 岡田委員
- 中嶋委員
- 平野委員
- 松井委員
- 水本委員（オンライン）

<Bグループ>

- 白水副座長
- 竹田委員
- 千葉委員
- 西澤委員
- 平井委員

※乾座長は、グループには入らず、全体のとりまとめ役

1. グループ対話（50分）

市民意見を聴く場を踏まえ、次期ビジョンの「目指す姿」や「施策」に盛り込むべき内容は？

2. グループ対話の共有（5分）

3. 全体対話（15分）

次期ビジョン素案の全体を通して、盛り込むべき内容は？